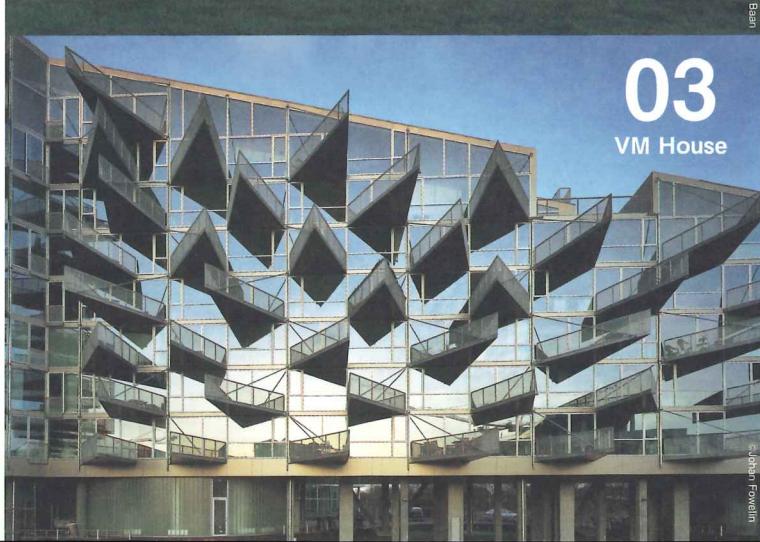
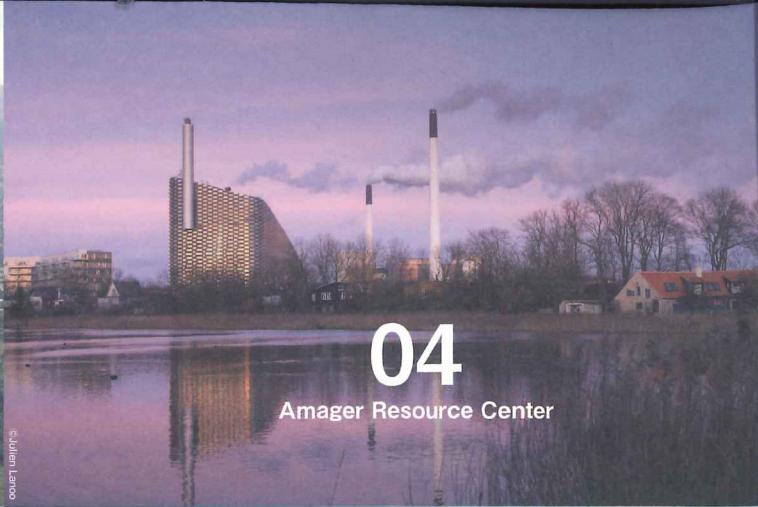


O-CUBE

CLUB OZONE
Membership Magazine
for Professional
Vol.185 Jun.2017





DANISH ARCHITECTURE NOW



変容する シガーボックス。 デンマーク建築の 最前線

text by Shuhei Kamiya

まさに今、大きく変容しつつあるデンマークの建築。その波は国外にも広がり始めている。牽引役はご存じ、ビャルケ・インゲルス・グループ(BIG)だ。この動向は日本の建築の未来にとって多くの学びがあると、文化庁研修で現在デンマークに在住し、BIGでシニアアーキテクトとして働く神谷修平さんは感じている。

数年前にデンマークを訪ねる機会を得て、ビャルケ・インゲルス率いるBIGが設計した集合住宅群に出会った。その一つの「8 House」は、中庭型の規定のマスター・プランを受け継ぎながら全体を8の字の形にし、屋上庭園を地面からのスロープでつなげている(01、2009年)。他方、「The Mountain」は別棟で要求されていた駐車場のボリュームを、傾斜した基壇として集合住宅と合体することで全戸に庭を持たせた(02、2007年)。また、「VM House」はVとMの二つの平面形で構成し、各戸に豊かな眺望を与えていた(03、2005年)。いずれにも住まいに対する根本的かつ大胆なアイデアが盛り込まれ、次代の建築をつくり出す勇気を感じた。

BIGに勤めてからも、これらの集合住宅には幾度となく訪れ、設計者たちの話を聞いた。法規やコストなどの厳しい制約から、かつてなかった形の建築を実現する苦労の中に、設計者たちの粘り強さやしなやかさがうかがえ、驚嘆したものである。

ビャルケの設計思想の根底にあるのは「なぜ世界中の建物は同じように四角いのか?」という疑問だ。これにはデンマーク建築の歴史も関係している。かつてこの国の建築といえば、アルネ・ヤコブセンが設計したものに代表されるシンプルな矩形のモダニズム建築。それらは洗練されているとの評価を受けながら、世界の建築が百花繚乱の様相を呈するようになると、味気ない「シガーボックス」と呼ばれもした。しかし、湖や森に恵まれる自然環境で、外部空間をうまく使うことにはもともと長けた国民性だ。蓄積されたデザイン文化が、新たな発想を建築の形そのものに求めたのがこの10年ともいえる。

デザインの発想は、与条件そのものを徹底的に疑うことから生まれる。「Amager Resource Center」のコンペで当初要求されていたのは、典型的な資源化センターの外観デザインだった。この類の施設は都市の中で環境的には機能しても、同時に大きな障害物となって孤立する。多くのスタディを重ねて最後に見つけたのは、必要な機能を配置した結果、生まれた屋上のスロープをスキー場にすること(表紙、04)。これによりこの建築は社会的な役割を見つけた。デンマークの冬は寒く雪も降るが、山がない。屋上の勾配は最も人気の高い隣国スキー場と同じ、というアイデアだ。

BIGの造形に共通するのは、デンマークの玩具レゴのように、システムを一度解体して再構築しつつ、機能を発見する感覚



07

Hyper Loop

だ。幼少期にレゴから影響を受けたことを明言するビャルケは、今年竣工する新たなミュージアム「The Lego House」のコンペにも勝利した(05)。このミュージアムを設計するためにBIGを設立した、というのはプロジェクトを勝ち取るためだけの殺し文句ではないだろう。英国ロンドンでの「Serpentine Pavilion」はたった一つのユニットが公園のストリートをつくるという発想だったが(06、2016年)、これもレゴの基本概念であるシステムティック・クリエイティビティの一例に見える。

「デザインという仕事のベースにはヒューマンリソースがある」というビャルケの言葉を目の前で聞いたとき、BIGという組織をより理解できた気がした。ビャルケはクリエイティブ・ディレクターであり、パートナーを筆頭に、ビジネス、建築、構造、設備、ランドスケープ各部門のスペシャリストが脇を固める。事務所はカルスバーグのビル工場を改装した大空間で、クリエイティビティを求めて世界中から若い人材が集まる(13)。自由な発想を制限するものはすべて取り払われ、所内は「わいわい」とい

う表現がふさわしい賑やかな雰囲気だ。また、BIG IDEASはプロダクトなど建築以外の領域を専門にする親子組織で、ドバイで計画している次世代の交通システム「Hyper Loop」プロジェクトのように、領域を超えたデザイン活動には不可欠な存在となっている(07)。

そして今、BIG同様に勇気としなやかさを備えながらも異なるアプローチで、デンマーク建築界に新風を吹き込む若手建築事務所が同時多発的に現れている。

コペンハーゲンの重要なハブであるNørreport駅(08、2015年)の再生を成功させたCOBEは、すでに市内の複数の大規模再開発プロジェクトのコンペで勝利を収め、コペンハーゲンの未来を担うことが明らかだ。その再開発地区の一つ、Nordhavnでは集合住宅「The Silo」がまもなく竣工する(09)。

JAJA Architectsは駐車場とスポーツ施設を巧みに融合させた「ParkNPlay」で、再開発地区Nordhavnの新たなシンボルをつくり上げた(10、2016年)。コンペで勝ち取ったSydhavnen教会の新築案は

国内で大いに注目を集めている(11)。

主に商空間のインテリアを手がけるNorm Architectsは、米国ポートランドからコペンハーゲンに拠点を移した「KINFOLK」の本社内装を設計した(12、2016年)。その空間は北欧のエッセンスに日本のともいえる侘び寂びの要素を取り込み、新しい表現に昇華していく驚く。

これらのプロジェクトはいずれも、日本語で言われるところの「建築」の領域にとらわれない、自由なアイデアに満ちている。デンマーク語の「Arkitektur」の持つ広がりなのかもしれない。

最後に、一方でアカデミーを中心にデンマークデザインの伝統を守る流れがあることも記しておく。伝統と変革、二つの流れがぶつかり合うなかで競争力が高まり、新たなデンマークらしさが生まれている。

Bjarke Ingels Group(13)

建築家ビャルケ・インゲルスにより2005年に設立。通称BIG。上海万博のデンマーク館の設計を担当するなど同国を代表する建築設計事務所。コペンハーゲンと米国ニューヨークを主な拠点とし、建築、ランドスケープ、プロダクトまで幅広くデザイン。RIBA、AIAなど受賞歴多数。ビャルケは1974年デンマーク生まれ。デンマーク王立芸術アカデミー卒業後、オランダのOMAに勤務。2001年BIGの前身となるPLOTを設立。

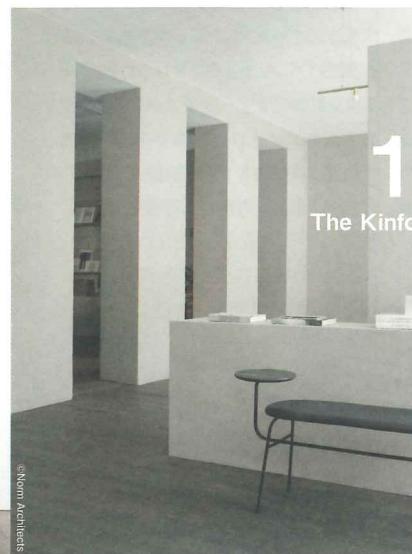
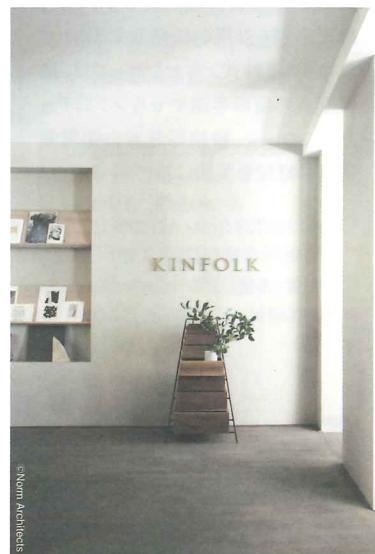
神谷修平

1982年愛知県生まれ。2007年早稲田大学大学院理工学研究科修了後、隈研吾建築都市設計事務所に勤務。「九州芸文館」「茅乃舎日本橋室町店」「プロダクト「TSUMIKI」などを担当。文化庁新進芸術家海外派遣制度にて2016年からコペンハーゲンに滞在。BIGでシニアアーキテクトを務めながら、北欧の文化・デザインを研究中。



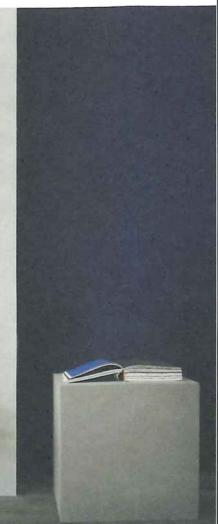
11

New Church in Sydhavnen



12

The Kinfolk Gallery



13

Bjarke Ingels Group

